



2か月ごとに国立環境研究所（NIES）の災害環境研究の“いま”をお伝えします。

環境創造センターの本館が始動！

福島県が三春町に建設していた環境創造センターの本館が完成し、10月1日より福島県が業務を開始しました。NIESも、来年度の研究棟への入所に向け、着々と準備を進めており、災害環境研究の更なる前進を目指します。



環境創造センター本館

お知らせ

10月 福島県環境創造センター（三春町）本館開所式（10/27）

最近の動向

5月 [廃棄物資源循環学会論文賞を受賞](#)（多島良ほか）

8月 [仙台市の蒲生干潟への津波影響に関する研究論文を発表](#)（金谷弦ほか）

国際アドバイザーボード会合を開催し、災害環境研究について海外の学識者と意見交換

災害環境研究セミナー「飯館村懇談会 in NIES：菅野宗夫さんを迎えて」を開催

（講師：菅野宗夫氏（飯館村農業委員会会長・ふくしま再生の会理事））

Webサイト「[災害廃棄物情報プラットフォーム](#)」をリニューアル

9月 日本自然災害学会学術奨励賞を受賞（多島良ほか）

[オープンソースの放射性セシウムの森林動態予測モデルを開発](#)（仁科一哉ほか）

研究情報誌「[環境儀](#)」第58号において特集記事を掲載

平成26年度「[災害環境研究](#)」成果報告書を発行



論文賞を受賞して喜びの表情を浮かべる多島研究員（廃棄物資源循環学会論文賞）



海外学識者との意見交換の様子（国際アドバイザーボード）



飯館村の将来像を語る菅野氏（写真中央）（災害環境研究セミナー）

環境儀No.58 被災地の環境再生をめざして

国立環境研究所が発行している研究情報誌「環境儀」第58号で、災害環境研究が特集されました。

今回は、災害環境研究の中の「環境回復研究」にスポットを当て、放射性物質による環境汚染からの回復研究のこれまでと今後について紹介しています。災害環境研究に携わる研究者へのインタビューも満載です。ぜひ一読ください。

<http://www.nies.go.jp/kanko/kankyogi/index.html>



PG1-環境回復プログラムの紹介

～原発事故後の被災地の環境について調査し、環境回復への貢献を目指しています～

① 森林・河川の放射性物質の存在量や動きを測定して、将来の予測に取り組んでいます。



① 森林の中にある放射性セシウムを調査しています (南相馬市)



② 河川に流れている放射性セシウムを調査しています (飯館村 真野川)



③ ダムの底にたまっている放射性セシウムを調査しています (飯館村 はやま湖)

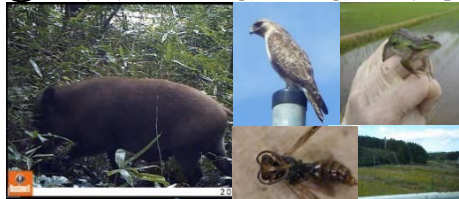


川の流れを通じて、放射性セシウムはどれぐらい下流に運ばれてくるの？



放射性セシウムは主に大雨の時に土砂とともに川へ流れ出ます。多い時は、1回の雨で年間流出量の半分が流れ出ることがあります。しかし山林に残っているセシウムのうち川に流れる割合は、その蓄積量に関わらず、1年間でわずか0.1%程度であることがわかりました。

② 被災地の植物・動物を観察し、原発事故や住民避難による影響を調査しています。



① 哺乳類、鳥、カエル、昆虫、植生等を対象に、9市町村（避難指示区域を含む）で調査を行っています



② トラップや録音装置によって昆虫や鳥の調査をしています (浪江町)



③ 自動撮影カメラによって哺乳類の調査をしています (浪江町)



住民の避難がどうして生き物に影響を与えるの？

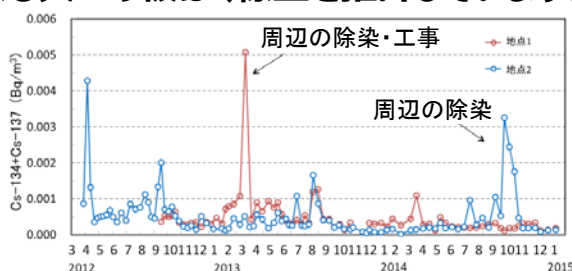


避難によって農林業などの営みが停止するため、一部の植物が生い茂ったり、水田のような湿った場所がなくなる、といった環境の変化が生き物に影響を与えることが予想されます。

③ 原発事故で放出された放射性物質による人への被ばく線量を推計しています。



① 空気中放射性セシウム濃度の測定をしています (飯館村)



② 空気中放射性セシウム濃度の測定結果を表しています (飯館村・2箇所で測定)



空気中にただよっている放射性物質による内部被ばくはどのくらいなの？



飯館村の場合、周辺の除染作業等で一時的に高くなる場合もありますが、空気中の放射性セシウムは、1立方メートルあたり0.001 ベクレル以下で推移しています。内部被ばく線量にすると、最大に見積もっても、年間0.001 ミリシーベルト程度です。